

リテラシー向上を目的とする教育プログラム開発に関する中間報告 － 2006-2008 年度の取り組みから－

筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター

細谷美代子

要旨：学生のリテラシー向上を目的とする教育プログラム開発を 2006 年度から行っている。学生の興味関心の幅を広げるために新聞を読むことを奨励し、記事に基づいて文章を書く課題や小テストなどを「リテラシー向上短期プログラム」として継続的に試行してきた。4 年計画のうち 2006-2008 年度の 3 年間における実施内容と参加者による評価等を報告する。

キーワード：リテラシー、教育プログラム開発、新聞

はじめに

大学生が新聞を読まなくなったと言われて久しい。理由としていくつかの点が指摘されている。代表的なものはいわゆる「活字離れ」であり、他に「速報性に欠ける」「ネット志向」「購読費」などがある。情報収集における紙媒体の地盤低下は新聞に限らない。重くかさばる従来の辞書類は敬遠され、電子辞書の時代になっている。新聞など紙媒体による情報発信の劣勢という状況に今後も大きな変化はないだろう。

しかし、情報発信力や即時性という視点からではなく、リテラシーを高める言語資料、教育素材として新聞を見るならいまなお利用価値は高い。現代社会を映す言語資料として新聞を見ると、多種多様な分野と日常語から学術用語までさまざまなレベルのことば・用語・表現が紙面に存在することに気づく。高等教育における喫緊の課題として大学生のリテラシー向上、論理的思考の鍛錬、論理的文章作成能力の涵養が挙げられる今、豊富な言語素材としての新聞を活用することが課題の改善・解決に資するものと思われる。

筆者は 2006 年度から新聞を活用した「リテラシー向上短期プログラム」を試行してきた。プログラム参加者は筑波技術大学産業技術学部在籍学生とし、毎年、初年次学生を中心に上級学年学生も対象としている。

本稿ではその概要と学生の記事選好状況および学生による評価アンケートの一部を報告する。

1. 2006 年度

1.1 プログラム I

実施期間

2007 年 1 月 10 日（水）から 2 月 9 日（金）の 5 週間。

実施内容

06 年度「日本語表現法 B」の受講生に授業日の新聞（朝日新聞茨城県版・朝刊）を配布する。学生は朝刊紙全体から興味関心を持った記事一篇を選び約 400 字でコメントを書き次回（翌週）の授業時に提出する。筆者がコメントに添削を加えて、さらに翌週、返却する。個々の学生はこの活動に計 4 回参加することになる。記事選択は基本的に自由とするが「番組欄」「株式欄」「スポーツ記事」等は除外とした。毎回約 50 人が参加し、提出された課題数は 196 篇であった。

考察

プログラム I の活動は「読む」「対象記事の選択」「書く」「振り返り」という一連の流れから成る。当初の予想では記事選好に一定の傾向が出てくるのではないかと思われたが、実際は図 1 に示すようになかなか幅広い範囲から選ばれていた。分野別分類例を資料 1 として稿末に掲げた。指導では新聞全体を読んでから記事を選ぶよう求めたが、事後アンケートの回答（資料 2）から見ると、44 人中 29 人が「全

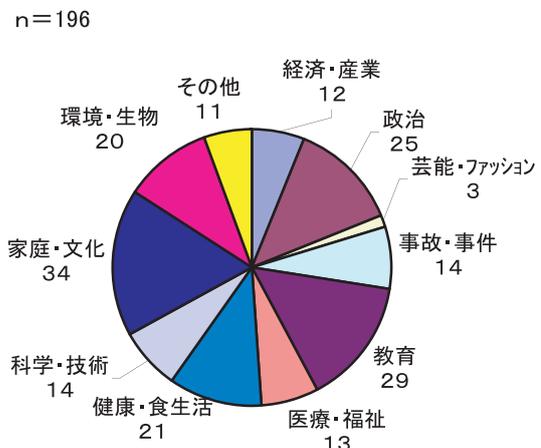


図 1 プログラム I 分野別記事選好数

体を読んで、多くの記事の中から選んだ」と答えており、約3分の2の学生がプログラムのねらいを理解して取り組んだことがわかる。普段は読まないテーマ・領域の記事も「全て読む」というルールに従って読んだ結果であろうか。

4週連続の課題に「かなり重荷だった」と答えた学生と「少し重荷だった」と答えた学生は44人中合わせて26人で半数を超した。授業外で同様のプログラムがあれば参加するかという問いには7人が「ぜひ参加したい」と答え、23人が「条件によっては参加したい」と答えた。

2. 2007年度

2.1 プログラムⅡ

実施期間

2007年6月6日（水）から7月5日（木）の5週間。

実施内容

プログラムⅠを経験した2年生から参加者を募った。応募した学生2人を対象に以下のように準備会を含め全9回の活動を行った。

準備会（6月6日） 目標・ルール・日程等の確認

第1回（6月12日）昨年度提出課題の検討（読解と表現）・新聞記事2件を資料として提供

第2回（6月14日）前回配布資料の読み合わせ（読解）・課題：表現

第3回（6月19日）提出された課題作品（1次稿）の検討。検討方法はピア・レスポンス（peer response）及び指導者講評による（以下同じ）

第4回（6月21日）2次稿の検討

第5回（6月26日）3次稿の検討

第6回（6月28日）4次稿の検討

第7回（7月3日）5次稿の検討

第8回（7月5日）6次稿の検討

考察

Ⅰの参加者を対象にプランを策定し、約50人の2年生に呼びかけたが、結果は極めて少数の参加者にとどまった。その理由として次のようなことが考えられた。

- ・広報が十分でなかった。
- ・学生は出席すべき授業が多く、時間的余裕がない。
- ・募集時にプログラム期間を1カ月としたことが長期間であるとして敬遠された。

参加者数を限定し、活動時間を十分確保することでプログラムのレベルをⅠより上げることをねらいとした。任意参加のプログラムに応募してきた2人の参加者は自己のリテラシーを高めることに対してモチベーションが高く、取り組みの姿勢も真剣であった。しかし、指導レベルをや

や高めに設定したことから、修正稿の版を重ねても参加者と指導者の双方が納得できるレベルに達するのに予想以上の時間を要した。当初プランではプログラム期間中に2件を仕上げることにしていたが、結果は1件に止まった。

反省点として毎回の活動ごとの成果が参加者に見えにくかったかという点がある。その原因はやはり指導プランにあったと言わざるを得ない。参加者の自主性を重んじるという方針で次回に向けての原稿の見直しを「自らの気づき」と「ピア・レスポンス」に託したのだが、その結果、指導者の介入がタイミングのずれたものとなり、効果的に働かなかった結果である。

2.2 プログラムⅢ

実施期間

2007年6月20日（水）から7月6日（金）の3週間。

実施内容

07年度「日本語表現法A」受講生を対象とし、他はプログラムⅠに準ずる。課題作成は1人あたり3回であった。考察

プログラム内容はⅠに準ずるが、添削指導の体制に改善を加えた。Ⅰでは添削担当者は筆者1人であったが、Ⅱでは補助者を迎え、1篇を2人で見ることにした。役割分担として文法・用語・言い回しなどの適否を補助者が担当し、筆者が全体の構成をみるなどして、異なる視点からの指導を加えることができた。また、時間的ゆとりが生まれ、前年度よりきめ細かな添削が可能になった。

図2に示すように学生の記事選好は広範囲に分散し、特定の領域に偏ることがなかったのはプログラムⅠの結果と同じである。学生による評価は次のプログラムⅣの実施後、合わせて実施した（資料3）。

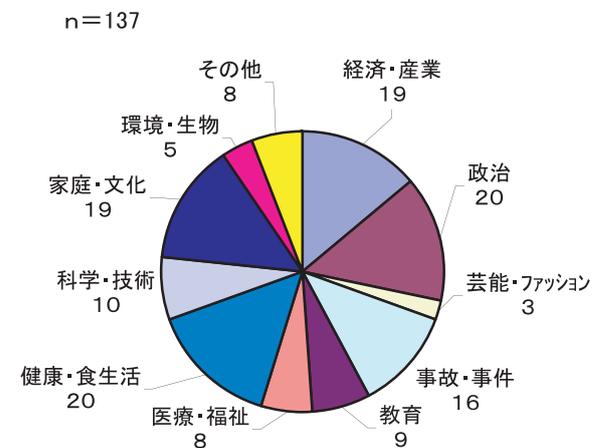


図2 プログラムⅢ 分野別記事選択数

2.3 プログラムⅣ

実施期間

2007年12月5日(水)から2008年1月11日(金)まで。
冬季休業を挟むため、実質4週間である。

実施内容

07年度「日本語表現法B」受講生を対象とし、他はⅠ・Ⅲに準ずる。課題作成は1人あたり2回であった。

考察

プログラムⅣの記事選好は広範囲に及び、Ⅰ・Ⅲに続いて特定の領域に集中することはなかった。集計結果は図3に示した。

記事の選び方についてアンケート(資料3)に「全体を読んで、多くの記事の中から選んだ」と答えた学生は43人中16人でⅠに比べてその割合は減っている。授業外で同様のプログラムがあれば参加するかという問いには11人が「ぜひ参加したい」と答え、11人が「条件によっては参加したい」と答えた。ここでもⅠに比べて積極的な学生が減少していることがわかる。一方、課題を作成するにあたっての負担感について8人が「かなり重荷だった」、24人が「少し重荷だった」と答えており、負担感はⅠより増大している。

Ⅰ・Ⅲで示唆されていたことであるが、興味関心のある記事とコメントを適切に書くことができる記事とは同じではないことを理解している学生が少ない。興味を持った後、さらに自分で調べていれば書くことができるが、調べずに記事から得た情報の範囲で書くことと独善的な内容や事実誤認のレポートで終わる。Ⅳではそうしたことも注意点として伝えたが十分活かされたとはいえない憾みがある。

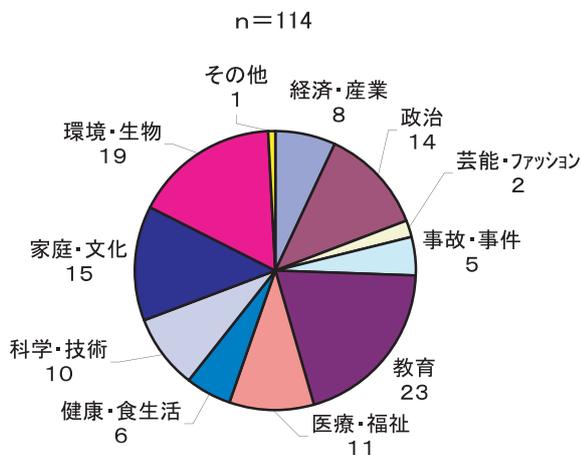


図3 プログラムⅣ 分野別記事選好数

3. 2008年度

3.1 プログラムⅤ

実施期間

2008年6月13日(金)から7月24日(木)の6週間。

実施内容

08年度「日本語表現法A」受講生に新聞を配布し、翌週、新聞から出題する小テストを5クラス各4回計20回実施した。出題内容は漢字の読み書き、ことばの意味、慣用句、熟語、成語などとした。後日、この小テスト問題をまとめて総集編を作成した。総集編には小テスト問題の他、応用問題も新しく加え問題数は全部で150問となった。総集編は受講生に配布し、クラスで受けた以外的小テスト問題にも取り組むことを奨励した。

考察

2006-2007年度に実施したプログラムⅠ・Ⅲ・Ⅳについて、事後アンケートから課題作成に負担を感じる学生が少なくないことが分かったので、08年度は内容を再検討し変更した。作文課題を止め、小テスト方式を試みたのであるが問題点もあった。まず、比較的言語能力の高い学生は資料として配布された新聞を読んでいなくてもある程度の得点が可能であったという点である。一方、基本的言語能力のやや低い学生にとっては努力しても朝刊紙一部の隅々まで目を通したうえで、出題されそうなことばや表現をチェックするということが難しかったという点である。したがって、小テストは実力テスト的なものとなり、当初想定した「新聞を読む→言語的知識・理解を自分で高める→成果を小テストで確認する」というサイクルが有効に機能しなかった。もちろん、中間層では、一定の成果を見たが、クラス全体が毎回の資料を読み込んで翌週の小テストに備えるという態勢には至らなかった。学生評価結果を資料4に示した。

3.2 プログラムⅥ

実施日

2008年11月5日(水)・6日(木)・12日(水)の3回。

実施内容

2年及び3年を対象に「日本語テスト大会」を開催した。同年1学期に実施したプログラムⅤの小テスト総集編を活用して実施した。参加者は2年生7人、3年生8人、計15人であった。

考察

参加者は対象者の2割に満たず低調であった。テスト実施時間が授業と重なり参加できないという連絡をしてきた学生もあったが、やはり少ない。広報活動として学内TVでの掲示、学生のメールアドレスへの案内文配布を行って

いた。開催自体は周知されたものの、出題内容、レベル、参加する意義などについての情報提供が十分ではなかったためと思われる。次回に同様の企画を行うときは参加者数を増やす方策をもう少し考える必要がある。

後日開かれた3年対象の就職説明会会場で就職活動に活かせる自己研修素材として希望者に問題集を提供した。この場で問題集を受け取った学生は22人であった。日本語テスト大会参加者と合わせると3年生約50人のうち60%の学生が小テスト総集編を手にしたことになる。

3.3 プログラムⅦ

実施時期

2008年10月29日(水)から12月5日(金)にかけての6週間。

実施内容

08年度「日本語表現法B」の受講生を対象とした。新聞を配布し、全体を読むことを奨励すると同時に、読者投稿欄から一篇を選び、投稿要旨と投稿者に対する返信という形で文章を書かせた。学生1人あたりの課題作成は4回である。

考察

プログラムⅠ・Ⅲを通じて、学生の中には新聞全体から自由に記事を選んでよいということにかえて負担感を持つ者がいることがわかった。また、適切なコメントを書くことができなかった例には、約400字という指定の字数でコメントを書くのには向かない記事を選んだ結果であることも少なくなかった。こうした問題点を解消する一つの試みがプログラムⅤであったが、小テスト形式にも問題が見られたため再び文章表現形式にし、Ⅰ・Ⅲとは異なる活動を策定したものである。

読者投稿欄を指定したのは、一般の記事より主張が明確であるため、それに対する意見を書きやすいであろうと思われるからである。さらに投稿者の主張を正確に把握した上で自分の考えを書くという作業手順を誘導するために投稿要旨を書くこととした。したがって意見文を書く前に要旨を書くという「手順」を重視し、要旨の書き方そのものについては特に注意を与えなかった。しかし、提出されたものを見ると、要旨の書き方に問題がある例が多かったため、改めて要旨の書き方について解説をすることとなった。

他方、今回のねらいの一つである「主張内容の妥当性・整合性の確保」に関しては一般記事についてコメントする時よりある程度改善された。

4. 総括

アンケート結果などから見えてくる、学生のリテラシー

に対する意識・態度は次のようなものである。

1. 学生は自らのリテラシーを高める必要性を認識している。
2. リテラシーの向上を目指す教育プログラムに関心を持っている。
3. 個別の文章添削指導に対するニーズは高い。
4. 2年生・3年生では課外活動に対して関心を寄せながら、実際は参加するに至らない者が多い。

3年間に実施した7件のプログラムについては次のようにまとめられよう。

1. プログラムⅠ・Ⅲ・Ⅳのように「読む」ことと「書く」ことを合わせた活動内容は参加者にとって負担は大きい、反面達成感も得られるものである。
2. プログラムⅡのような個人指導に近いプログラムを短期集中型で展開するのは参加者と指導者双方に負担が大きい、期間・指導頻度・レベルなどを周到に設定すれば高い効果が得られる。
3. プログラムⅤのように資料から小テストを出題する方式は参加者のモチベーションに配慮しつつ出題方式・内容・レベルを決定することが望ましい。
4. プログラムⅥのように参加者を募って行う単発の活動は広報のあり方が重要である。
5. プログラムⅦでは文章作成に方向性を与えた。その結果、資料選択と主張の方向を定めやすくなったという利点を確認された。

今後の課題としては次のようなものがある。

1. 上級学年を対象とするプログラム策定および実施。上級学年の参加を促し、参加率を高めるための環境整備を含む。
2. リテラシー向上を目指す学生の自律的な活動への支援。試行済みプログラムの継続的改善と並行してこれらの課題に取り組みたい。

本稿は科学研究費補助金による研究成果の一部である。(18611003：聴覚障害学生のリテラシーを高める教育プログラムの開発)

文 献

- [1] 細谷美代子：論理リテラシーを高める論文表現演習。月刊国語教育研究，431：48-53, 2008.
- [2] 細谷美代子：日本語表現法 A (2008) 小テスト総集編，2008.

資料1 プログラムI 記事分類例

経 済 ・ 産 業	駄菓子で教育 賃貸マンションの共益費値上げ 国民の負担増 地方の滑走路路線廃止 マグロの漁獲量制限 ゲームの売り上げ
政 治	議員宿舎問題 18歳は大人? 裁判員制度 残業代ゼロ法案 昭恵さん初の応援演説 トルコの言論弾圧事件 北朝鮮に対する経済制裁 裁判に被害者参加 児童虐待対策 北朝鮮拉致問題に対する政府の態度 ゲイパレードに対するモスクワ市長の発言 取調べ録音録画 「産む機械」発言関連
芸能・ファッション	ドラマの配役決まる アニータ 落ち込む雑誌発行部数
事 故 ・ 事 件	飲酒運転 殺人 傷害 事件の家族の手記 ネット競売担当者が詐欺
教 育	生涯学習 ゆとり教育見直し いじめ 大人のいじめ いじめの定義 週休2日制の見直し 大学全入時代 教育再生会議 給食費滞納 センター試験平均点 水戸の私立図書館「モモ」 「蘭玉」作り通じ園児と交流 野口健さん中学生と交流
医 療 ・ 福 祉	赤ちゃんの病気 アメリカのホームレス 障害も個性 輝く芸術 急げ赤ちゃんのもとへ 子育て支援 茨城県児童の身長体重全国平均と比較
健 康 ・ 食 生 活	納豆ダイエット・品薄 賞味期限偽装問題 山崎パンが不二家支援 ペットボトル牛乳秋にも 受動喫煙からの保護 フランスでも全面禁煙の動き ミネラルウォーター対水道水 消費期限はどう決まる
科 学 ・ 技 術	位置情報通知システム 南極「手形」を電子化へ ミサイルによる衛星破壊 ネット検索 windows vista 台湾新幹線野鳥の悲劇 暗号化通信 VPN 開発
家 庭 ・ 文 化	貧乏ゆすりはなぜ起きる? 言葉遣い ロストジェネレーション 出生率 男女平等標識 IT時代の漢字 増殖する「おれちん」 自宅の防犯 番組の捏造・打ち切り 相談の投稿 ゆうパック「不当表示」 NHK受信料関連 落花生で「鬼は外」 建築家による自宅の設計 過大広告に排除命令
環 境 ・ 生 物	カエル・ツボカビ症 CO2 暖冬(少ない降雪量・早咲き) 鳥インフルエンザ 海面上昇 チンパンジータレント
そ の 他	2007年問題 スポーツ 阪神大震災12年 災害関連 愛国心

資料2 プログラムI 学生による評価

回答者数：44人 アンケート実施時期：07年2月

Q1：課題作成にどのくらいの時間を費やしましたか？4回の平均的な時間を、1-1と1-2に答えてください。

1-1 「読み」と「書き」を合わせて

ア. 30分以下	イ. 30分～60分	ウ. 60分～90分	エ. 90分以上	無回答
4	20	11	8	1

1-2 「書き」だけで

ア. 30分以下	イ. 30分～60分	ウ. 60分～90分	エ. 90分以上	無回答
13	20	6	3	2

Q2：このプログラム以外で、新聞をどの程度読んでいますか？

ア. 毎日必ず	イ. ほぼ毎日	ウ. ときどき	エ. たまに読む	オ. 読まない
2	5	10	17	10

学生の意見 ※ ネットがおも
※ 家にいるときは毎日読まない。

Q3：記事の選び方について

注 Q3でアとイの両方に回答をした者が1名いる。

ア. 全体を読んで、多くの記事の中から選んだ	イ. 興味関心のあるページを中心に読み、そこから選んだ	ウ. 見出しだけ読んで、そこから選んだ	エ. その他
29	12	1	3

エ. の意見 ※ 全体を見、興味関心のあるところをもう一度見、そこから選んだ。
※ 自分に身近なものから選んだ。
※ 全体をバラ見しつつ、興味を持った見出しの部分を読み、その中から選んだ。

Q4：1週間に1件、4週連続の課題作成という負担は

ア. かなり重荷だった	イ. 少し重荷だった	ウ. それほど負担ではなかった	エ. 全く負担を感じなかった
7	19	16	2

Q5：授業外で同様のプログラムが実施されるとしたら、参加しますか？

ア. ぜひ参加したい	イ. 条件によっては参加したい	ウ. 参加しない
7	23	14

Q6：この試行プログラムを受けた立場から、感想・要望・提案などを書いてください。

5で「イ」と答えた人は、どういう条件なら参加できそうか、書いてください。

- ※ 情報を得ることができるし、文章の書き方の練習になるので、やってみて良かった。
- ※ 個人の力に合わせた指導が受けられる
- ※ このプログラムが成績に関係するのは苦しい。授業外なら喜んで参加すると思う。
- ※ 興味がある記事をコメントするのは楽しかったが、興味がある記事がないときは大変だった。
- ※ リテラシーが、読み書きをするたびに徐々に向上していくのを感じた。また、採点してもらうことで今まで誰も教えてくれなかった自分の間違った表現の仕方が分かって良いなと思った。5に関して、義務ではなく自由に参加できるという条件であれば参加したい。
- ※ 新聞を読むのがなれていないので、意味をつかむのが大変でした。けれど、情報が増えてよかったです。
- ※ 文章を書くことが苦手な私にとって苦しい課題だったが、私なりに書くことが楽しめた。このことで新聞を読む機会が増えた。
- ※ 課題なしという条件なら。このプログラムを通して、自分は情報不足だと改めて実感した。文章も、自分から見ると書き方がきちんと押さえてないと思った。それらを補うためには自分の興味のある小説、新聞を読むしかないと思ったのである。
- ※ もう少し説明が欲しかった。どういう所がダメで、どう直せば良いのか etc... 学生自ら聞きに行くのが常識であると考えますが・・・
- ※ もっといろんなメディアでやってみたい。
- ※ 記事が決められていなくて、自分で選ぶというのはよかった。

資料3 プログラムⅢ・Ⅳ 学生による評価

回答者数：43人 アンケート実施時期：08年2月

Q1：課題作成にどのくらいの時間を費やしましたか？5回の平均的な時間を、1-1と1-2に教えてください。

1-1 「読み」と「書き」を合わせて

ア. 30分以下	イ. 30分～60分	ウ. 60分～90分	エ. 90分以上
0	10	20	13

1-2 「書き」だけで

ア. 30分以下	イ. 30分～60分	ウ. 60分～90分	エ. 90分以上	無回答
4	26	8	4	1

Q2：このプログラム以外で、新聞をどの程度読んでいますか？

ア. 毎日必ず	イ. ほぼ毎日	ウ. ときどき	エ. たまに読む	オ. 読まない
1	4	13	15	10

Q3：記事の選び方について

ア. 全体を読んで、多くの記事の中から選んだ	イ. 興味関心のあるページを中心に読み、そこから選んだ	ウ. 見出しだけ読んで、そこから選んだ	エ. その他	無回答
16	18	7	1	1

エ. の意見 ※ 容易に文章が書けるような記事を選んだ。

Q4：1週間に1件、2～3週連続の課題作成という負担は

ア. かなり重荷だった	イ. 少し重荷だった	ウ. それほど負担ではなかった	エ. 全く負担を感じなかった
8	24	10	1

Q5：授業外で同様のプログラムが実施されるとしたら、参加しますか？

ア. ぜひ参加したい	イ. 条件によっては参加したい	ウ. 参加しない
11	11	21

Q6：この試行プログラムを受けた立場から、感想・要望・提案などを書いてください。

5で「イ」と答えた人は、どのような条件なら参加できそうか、書いてください。(一部)

- ※ 新聞は元々膨大な量のデータが圧縮され、1つの記事におさまるよう言葉を厳選し、要約した情報形態である。普段新聞を読む機会が少ないが、TVのニュースやインターネットの情報とは明らかに違うなと感じた。ニュースでは映像で伝えることが多く、アナウンサーの声が聞こえない私達では受け取れる情報に限りがあるが、文字という媒体を通す方法が最も情報受信に適していると思う。社会一般の常識を見につけるためには日頃から新聞を読むことが大切だと思った。
- ※ 新聞を読んでさらに詳しく説明したり反論することによって、日々の会話なども一層濃くなり、構想から表現まであまり時間がからなくなってきた。問題を示すとすれば、他の人と自分は異なる内容を提出するため、自分の上達を知るための比較が出来ない所。
- ※ ほかの人が書いたコメントを見たい。書くだけでなく、発表も良いと思う。
- ※ 最初は難しかったが、回数を重ねるごとに慣れてきてスムーズに書けるようになった。ただ、毎回新聞記事は異なり、書きやすい記事があった時はよかったが、そういう記事がないときは難しかった。同じ記事について書いてみるのもいいかもしれない。そしてその中で一番良かった人のものをみんなに参考として見せてもいいと思う。
- ※ 400字だけでなく、400、600、800字の課題もあった方がいいと思う。800字だと気軽に書ける人もいます。
- ※ 記事の背景まで深く考えられるようになった。
- ※ 2週間に1つとか、論文にふさわしくない表現などがあつたらそれを指摘し、どういう表現ならばいいのかを説明してくれるとか・・・ならいい・・・かな。
- ※ 社会人になる参考になるので、このプログラムが良いと思います。
- ※ 自分の立場から見ると、記事の内容をまとめるのは大変だった。また、客観的に見ることも大事だと感じた。記事に書かれたことから、色々なことを考えるはずが出来るので、そうできるように、色々な記事を読んでおこうと思った。
- ※ 私たちに関わりのある事柄、私たちにとって必要な知識を吸収するには良い機会だった。
- ※ 5. イー興味のある分野について調べることができれば。デザイン学科なら、ユニバーサルデザイン、アートについての記事など。
- ※ 6月はかなり時間あって、大体やったが、そのときは楽しかった。今はあまりやれていないが次があれば、続けたいと思う。5. イー日時
- ※ 文章力をつけるという意味では良かったと思う。
- ※ ほぼ毎日読んでいたとはいえ、まとめてコメントをする作業はしていなかったため良い練習になったと思う。
- ※ 私の場合、読むことはともかく書く方で問題が多かったと思われる。

資料4 プログラムV 学生による評価

回答者数：50人 アンケート実施時期：08年7月

1. 本プログラムでは「朝刊一部を隅から隅まで読んでみる」のが目標の一つでした。あなたの読み方の実際はどうでしたか。4回のうちに変化があった場合、後半を基準に考えてください。

a：小テスト除外領域も含め、ほとんど読んだ。	2
b：小テスト出題対象領域は、ほとんど読んだ。	11
c：関心のある領域は、小テストに関係なくほとんど読んだ。	16
d：ほとんど読まなかった。	16
e：その他	5

学生の意見 ※関心のある領域だけ読んだ。

※小テスト出題対象領域だけではなく、関心のある領域も読んだ。

2. 小テストの準備状況について答えてください。4回のうちに変化があった場合、後半を基準に考えてください。

a：かなり意識して、時間をかけて（読みを含め1回あたり90分以上）準備した。	5
b：意識したが、時間はあまりかけなかった（読みを含め1回あたり90分未満）。	25
c：意識しなかった。	18
d：その他	2

3. 小テストの問題について答えてください。

a：紙面で初めて見た表現・語句が多かった。	11
b：紙面以外で見たことのある表現・語句が多かった。	21
c：どちらともいえない。	18

4. プログラム終了時点での自己評価として、あてはまるものを答えてください。（複数解答可）

a：社会問題に知識や関心を持つようになった。	12
b：文化・教養記事に知的刺激を受けた。	12
c：徐々に速く読めるようになった。	8
d：新聞を読むことが負担ではなくなった。	7
e：自覚できる成果はない。	23

5. 本プログラムについて自由に記述してください。（一部）

- ※ 範囲が広すぎて読む、分からない単語を調べる、復唱（ママ）するという流れまではいかなかった。情報科は、授業数が多く、特に今月は課題が多く、新聞を読む時間までまわせなかった。たしかに、このプログラムはいいと思うが、もう少し範囲をしばって欲しい。
- ※ また、できるといいかもしれない。小テストということで、勉強のため最初は新聞よむのが面倒だったけど、少しずつであるが、読むのが苦にならなくなってきた。小テストが終了したとたん、再び読まなかったことが多いから、うちとしてはもう少し習慣がつくまでは続行して欲しいと思います。
- ※ 一応新聞は一通り読んだが、小テストは新聞を読む以前に知っている言葉が多かったので、ちょっとヤル気が消えていったことがある。たま～に「へえ～」な問題を作るべきだ。
- ※ 新聞の面白みがよくわかって少し楽しかった。でもレポートが多いときに、時間がなくて～というのもありました。
- ※ テスト中にあったことわざ、ごい、熟語は前から知っているものばかりだったので問題はさほど難しくなかった。
- ※ 4. については元々新聞は毎日読むほうだったのであてはまるものはないが、1回目と最後の成績を比べると上がってきている理由としてテストをやっていくうちに「文字なれ」をしたのではないかと思います。
- ※ 新聞を全て読めるような時間が無かった。
- ※ 自分に足りない部分が確認できるので良かった。実家にいた頃は毎日読んでいたからという気持ちで臨んだが、甘かった。まだまだ学ぶことが必要と分かった。
- ※ 現代の新聞はかんじんなことが書かれていないので、読む気になれなかった。
- ※ 本プログラムをやって、それが身につくことでどういかにいけるかを自覚できるようになった。
- ※ 問題の所は新聞のどこに書かれてあったのか気になる。出そうな漢字など、何回もチェックしたが、テストの時、出なかったときもあるのが悔しかった。
- ※ 日経新聞をとっているので2つの新聞を読むのは少し疲れた。

An Interim Report on Short Programs to Improve Literacy

HOSOYA Miyoko

Research and Support Center on Higher Education for the Hearing and Visually Impaired
Tsukuba University of Technology

Abstract: Since 2006, we have been implementing a series of short programs to improve students' literacy. We encouraged the reading of newspaper articles to develop broad interests and awareness. We then assigned writing exercises and short tests based on the newspaper articles. Here, we report on the curriculum implemented in consecutive academic years (2006-2008), and students' post-course evaluation of the program.

Keyword: Short programs, literacy, newspaper articles